

「あわれ、牛の背中」(伊勢湾台風)

岐阜市在住 Oさん 70歳 男性

戦後の台風は「ジェーン」とか「キャサリン」とか命名され、岐阜空襲で焼け出された私たち家族のバラック住宅はベニヤ板の屋根が吹っ飛んだぐらいで、伊勢湾台風までは恐怖といったイメージはそれほどない。

私が新入社員の昭和34年8月は9月の伊勢湾台風を予兆させるかのような集中豪雨が岐阜県一帯にもあり、当然のごとく鉄砲水の土砂崩れから逃れられなかった知人の母子が折角の夏休みに山奥のバンガローで犠牲になった。

その伊勢湾台風では新築のわが家は「柳に風」であったが、玄関の側溝を噴出する闇夜の激流にはほとんど一睡もできず、かつての学友たちの見舞いの電話の対応に追われた。

伊勢湾台風のものすごさを目のあたりにしたのは一週間後、名古屋から桑名へ走る国道一号線でだった。まるでもう「大渡河作戦」もいいとこ、両側に土のうが積まれた国道はいまだ一面泥海の海原が延び、あちこち樹木の上半身や家々の屋根に流木と共にぶつかりながら、あわれ、牛の背中がぷかぷか浮遊していた。

やがて、長島町などに温泉が発掘されようとは夢想だにしない台風一過の非情の秋だった。今も古びたアルバムを見るたび、あの伊勢湾台風が生々しく甦るのである。